

卒業記念「別府“温泉”大学の湯」で温泉染

～卒業を温泉で染めよう～ レポート

別府大学

広報室室長補佐 石川 万実

温泉染とは

2021年2月15日（月）、別府大学4号館1階の彫塑室にて、「温泉染研究所」代表のユキハシトモヒコさんを講師に迎え、学内の温泉を使った「温泉染」を体験するイベントを開催しました。3月に卒業を控えた国際言語・文化学科の芸術系コースの4年生9名が参加しました。

温泉染は、古くから染料や塗料として抗菌作用や生地を丈夫にする為などに使われてきた天然染料柿渋や草木の染料と温泉を使って染める染色法です。ユキハシさんは、5年ほど前から温泉染を研究しており、自宅でできる温泉染キットの開発や、オンライン体験会などを行い、温泉染を広めています。

今回は、キャンパス内にある学園関連施設「大分香りの博物館」の足湯の温泉を使用し、温泉染で卒業記念の手ぬぐいを制作しました。

いざ温泉染へ

はじめに、ユキハシさんから自己紹介をいただきました。ユキハシさんは、服飾学校卒業後フリーランスで、映画や舞台衣裳製作に携わっていました。東日本大震災がきっかけとなり、2013年より「旅する服屋さんメイドイン」として、車に足踏みミシンや染色道具を積み、日本各地を旅しながら、その土地ならではの制作を行う活動を始めました。その後、2016年に別府に移住。別府の豊富な湯量と個性豊かな温泉に感銘し、温泉染研究をスタートしました。街を歩き、出会った温泉で温泉染を行うと、場所ごとに染まる色が変わること面白さを感じたと、温泉染の魅力をお話いただきました。

続いて、ユキハシさんから、学生たちに温泉染をレクチャーいただきました。あらかじめ柿渋で染めた薄茶色の手ぬぐいを、輪ゴムや糸で縛ったり、板を挟んだりして、模様ができるよう準備をしました。



講師のユキハシトモヒコさん（前列中央）と完成した手ぬぐいを披露

その後、「大分香りの博物館」のハーブガーデンの足湯に移動しました。香りの博物館の温泉は、学内の第一源泉から引いており、地下250mから約63度の温泉が湧き出ています。足湯の湯口から汲んだ新鮮な温泉を長方形のコンテナに貯め、その中に手ぬぐいを浸します。

ユキハシさんが事前に行った染色テストで、継続的に温泉をかけることでより濃く染まることが判明したので、参加した学生・教員が一列になり、バケツリレーで、コンテナに温泉を汲み入れ、新鮮な温泉を循環させました。

30分ほど浸すと濃い茶色に染ってきました。仕上げに、細かな部分にもお湯がいきわたるよう布をよく揉んで、温泉から引き上げました。

別府ならではの卒業記念

再び、彫塑室に戻り、縛っていた輪ゴムや紐、板を外すと、茶色く染まった布に、薄茶色の模様が浮き上り、学生たちから歓声が上がりました。それぞれの模様のオリジナルの温泉染手ぬぐいが完成しました。

参加した学生からは「温泉で染めものができるなんて面白い!」「こんなに模様が浮き上がるとは思わなかった。大学に温泉を活用して、来年以降も続けたらいいと思う」などの感想が聞かれました。講師のユキハシさんも「温泉染を通して別府の温泉の魅力を感じてもらえた。学生のみな

んに楽しんでもらえてうれしい」と、話していました。

今回の企画では、キャンパス内の温泉を体感してもらおうとともに、別府の温泉の多様性を知ってもらう機会となり、“湯のまち”でのキャンパスライフの締めくくりになったと思います。ハーブガーデンの温泉で濃い茶色に染まりましたが、また違う温泉に浸すと色が変わるそうです。この手ぬぐいを持って別府の温泉や、他県の温泉巡りをして、自分色の手ぬぐいに染めながら、長く使ってもらえることを願っています。

別府を楽しみ尽くそう

広報室では、2019年より「別府“温泉”大学」として、学内の温泉をテーマとした研究・教育について情報発信を行っています。その中で、学生たちが4年間の大学生活を別府で過ごしていても、別府の温泉に親しむ学生が少ないことが判ってきました。キャンパス内にも温泉があることも知られていません。

日本一の温泉地にキャンパスがあるので、学生たちにもっと別府を楽しみ尽してほしい。今後も学内の温泉を活用し、地域と連携して温泉を体感し、温泉に親しむきっかけを作っていきたいと考えています。

(協力：豊の国千年ロマン観光圏事務局)



大学に隣接する大分香りの博物館の温泉を使って染めました